

江戸時代も半ばになると旅する者も多くなり、真言宗の信徒らは四国八十八ヶ所の巡礼に向かった。しかし、四国は遠くまた霊場は山岳にあるので、巡礼は困難を極め誰でも行ける所ではなかった。そこで身近に四国の霊場の写しを設置することで同じご利益を求めた。写しは四国霊場と同じに1番から88番まで、それぞれの寺院名を刻んだ大師像を安置するものである。

流山の周辺では「相馬八十八ヶ所」や「下総八十八ヶ所」、「庄内領・小金領八十八ヶ所」などが生まれた。流山市域では文政元年（1818）、鱧ヶ崎東福寺を総本地として「弘法大師二十一ヶ所」が設けられた。続いて文政6年（1823）、東福寺を総本地として「新四国江戸川八十八ヶ所霊場」が誕生した。下総88か所などの分裂と再編であったと伝わっている。地域は現在の流山市を中心とした周辺地域で、東福寺の末寺を中心としたものであったと思われる。大師像の残存から判断すると、21か所がそのまま組み込まれた場合や、88か所ができてからも21か所が併存していた可能性もある。また、残像する像の設置年を見ると文政6年に作成されたものばかりではなく、文政6年以降明治期に至るまでの年代に作られていることから、設置された寺院や場所が時どきにおいて変化したものと考えられる。特に、明治期の寺請け制度の廃止や廃仏毀釈、神仏分離などの影響から廃寺に追い込まれた寺院も少なくなく、大師像の移動や欠番の補充、真言宗以外の寺院や個人の参加などがあったものと思われる。

そうした背景の中、流山市内では新たな新四国八十八ヶ所が設置された。明治37年（1904）、下花輪の秋元吉平主導による「新四国新川村八十八ヶ所」が計画されたが、道半ばで洪水の被害に会い計画は頓挫した。大正2年（1913）、利根運河会社支配人森田繁男の提唱で「新四国利根運河八十八ヶ所」が設置された。続いて昭和3年（1928）、前ヶ崎に「新四国前ヶ崎八十八ヶ所」が、昭和8年（1933）、「新四国鱧ヶ崎八十八ヶ所」が設置された。流山市域の相次ぐ88か所霊場の設置に刺激を受けた東福寺は、昭和11年、廃寺などで欠番状態であった江戸川八十八ヶ所を再編整備し翌年より巡礼を再開した。総本地は東福寺。また、東京・尾久に東福寺の出張所というべき「守龍山尾久教会所」を設置、「江戸川八十八ヶ所霊場巡拝道順略図」を発行、東京方面からの巡礼者を促進した。略図には「まはり初めは流山鉄道ひれがさき下車一番東福寺からです」「札所には皆四国の砂を納め又四国札所の写生図を額面としてかてます」「大師御宿流山坂下柳屋旅館」「江戸川八十八ヶ所御詠歌 えどがはや清き流れの西東できた札所はあらたなりけり 東福寺雲水」おみやげ 万上味噌 天晴味噌」などが書かれている。

戦時中途絶えていた巡礼も戦後は復活し、各地で盛んに巡礼が行われていたが道路事情の悪化や大師堂の維持保存の問題などで、いつしか忘れ去られるようになった。四国では峻険な修行道や急階段などを解消するため、新たに車道をつくり今では観光バスも出入りできる霊場が多くなった。

今年（2023）は弘法大師空海の生誕1250年に当たり各地で巡礼が復活している。また、江戸川88か所は設置200年、利根運河88か所は設置110年、前ヶ崎88か所は設置95年、鱧ヶ崎88か所は設置90年の節目に当たる。

